The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	経済学方法論と社会存在論
Author(s)	葛城, 政明
Citation	大阪大学経済学. 2017, 66(4), p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60456
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

経済学方法論と社会存在論

葛　城　政　明[†]

要　旨

トニー・ローソンの経済学批判が世に問われ20年近くが経とうとしている。ローソンはその主張の根幹にバスカーの超越論的実在論を据えようとしたが，彼の議論とバスカーの議論を比較検討すると，超越論的実在論はローソンの経済学批判を導きはしたが，その主張にとって不可欠の役割を負っているものでない。主流派経済学の批判という点に関する限り，暗黙のものとなっているものを明示的に議論するという意味での哲学的，あるいは存在論的議論で十分である。そして実際，ローソンとその追随者の議論は存在論の明示化という路線を辿り社会存在論に至るのだが，この社会存在論がいまや実証主義に代わる社会科学の方法論のための実質的な内容を生み出しつつあり，それに応える経済学方法論が求められている。

JEL Classification：B41, B59
キーワード：経済学方法論，経済哲学，批判的実在論，社会存在論

1　はじめに

学問と批判は切り離すことができない。学問とはイデアを想起すれば済むような世界に住んでいない限り，人類はその誕生以来，知識の不在と無知の洪水の中に日々暮らしてきたと言わざるを得ない。そのなかでどんな虚妄に導かれようともまず文明を生み出せたことは，極めて特異的で奇跡に近いことであるが，それ以上に虚妄を修正する知的態度を制度として生み出しえた文化はなお特筆に値する。西洋は，この知的態度を制度として真っ先に社会の中に組み込みえたことが，科学という他文明には稀であった営みの拡大を可能にした理由であろう。科学が存在するこの世界は，あるべき知識の不在が実在し，かつすでにある不十分な，あるいは誤った信念の修正が可能な世界である。すなわち，逆説的に響くかもしれないが，無知と批判，あるいはあるべきものの不在の発見が絶えず明示化され続けるところに科学が成立しうるのである。

経済学は，他の科学と同様，人類の歴史の大半において不在であった。そもそも経済に何が存在し，そしてまた，文明の進展につれて経済がどのような存在となりうるかについて人類はほとんど無知であった。あるべきものの不在と無知へ関わることは，絶えざる誤謬と信念の変更を必要とすることである。したがって，経済学もまたその歴史と同じぐらい長く，多くの批判を生み出して来た。批判が存在することはその学問が科学にふさわしいための要件であろう。この意味で，いつも批判が存在したことは健全で正常なことである。

批判にも，様々なレベルのものがある。全く

[†] 大阪大学大学院経済学研究科准教授

の門外漢が世間の常識的先入見で批判あるいは単に非難をする場合もあれば，逆に，専門家が常に行っているような，その学問特有の価値観と方法論を大前提とした，学術論文の中の主張や論証レベル関わるものまで様々である。理科系のようないわゆる「科学」の典型と思われているものでは，前者はまれ，あるいは，ほとんど不可能であって，後者が学問の進歩に寄与する通常のプロセスであると信じられている。ある病気の治療法の研究が何年もなされながら，未だに治療が出来ないからと言って，注ぎ込まれた予算や倫理道徳のような人文社会科学的な側面を別にすれば，学問としての医学研究の内容を素人が疑って批判することはまれであろう。これに対して社会科学では，前者のような素人による批判も，その当否は別として，より容易になされる。なぜなら，どれほど専門的な言葉で武装しようとも，研究の対象は，全ての人が生き経験し既に知っている社会を対象になされていることが建前となっているからである。それゆえ，学問の方法論や術語は別にしても，結果はだれもが知っていると思えるからである。金融危機の際には，英国女王すらも，予測ができなかったと経済学を批判したのである（*Financial Times*, November 25 2008）。このような批判は，しかし，もちろん，経済学者が専門家である以上，経済コメンテーターとしてマスメディアに呼ばれでもしない限り，通常，取り合う必要はない。一つには，大半の専門家にとって，自らの研究内容と金融危機は直接関係ないからである。それだけではない。経済学は，適切な経済モデルを用意することで金融危機を予測できるであろうという大前提を，素人の批判者も抱いた上でのことであれば，批判は，単に一つの結果の失敗を指摘しただけであって，経済学者がまさに行おうとしている枠組みは暗黙に支持しているのである。したがって，確かに金融危機が予測できなかったことは「失敗」になるかもしれないが，そのようなことが可能になることによって正当化される学問的営為を批判したわけでないのである。かつてある総理大臣が「批判は励ましだと思っています」と述べたことがあるが，批判であっても同時に多くのことを承認ないし奨励している。この意味で，素人の批判は既存の経済学認識の暗黙の大前提を容認したメッセージとなっている場合すらありうる。

それではおよそ素人とも思えない学問上の大家が，専門的な学術論文レベルでなされる以上の批判をするとすれば，それはどういう状況であろうか。少なくとも，クーンが唱えたような通常科学における批判ではない。レオンチェフは，学術雑誌に「厳密に述べられているが的外れの理論的帰結を導く数式があふれている」（Leontief, 1982, 104）と嘆き，フリードマンは，「経済学は数学の秘教的分野になった」（Friedman, 1999, 137）といい，コースは「経済学は，現実世界で起きることとほとんど関係がない」（Coase 1999, 2）と述べているが，これはいったい何なのであろうか。この三人はいずれもノーベル経済学賞受賞者であるが，2008年の金融危機直後にノーベル賞を受賞したクルーグマンはさらに「過去30年間のマクロ経済学の仕事の大半は，よく言って役立たず，悪く言えば有害だった」[1]とすら述べ，数学モデルの「美しさを真理と取り違えた」（Krugman, 2009）と分析している。レオンチェフの嘆きは1982年のものであるから，専門雑誌の個々の学問内の論点に関わるものでない限り，同様の批判がどれほどなされようとも，過去30年以上にわたって何も変わっていないのである。実は，30年どころではないであろう。現実離れを1999年に嘆いたフリードマンは，1953年出版された著書で，理論にとって重要なのは現実性

[1] 2009年6月にLSE（ロンドンスクール・オブ・エコノミクス）で行ったライオネル・ロビンズ講義にてこのように語ったと*The Economist*（June 11 2009）は伝えている。

ではなく予測能力であると経済学の「道具主義」と呼ばれる立場を声高に唱えたのであるから[2]，少なくとも，さらに30年遡って同様の批判は解消されることなく存在していたのである。

もちろん，我々は冒頭に述べたように，不在と無知の海の中に，それゆえ途方もない時間を費やして，奇跡的な偶発的事態の永続化としての文明と知識を，そして科学を築いてきたのであるから，批判の継続とその克服にどれほど時間がかかろうとも不思議ではない。しかし，その一方で，我々はいつも必要な議論の不在に覆われている可能性にも留意しなければならない。批判は通常，大前提をそれほど異にはしないが，学問の詳細な前提とルールを知らない素人の素朴な推論によるものと，学問の詳細な前提とルールを体得しかつ守るがゆえに専門家の見解と見なされるものの二種類があり，制度的に対応可能なものは通常，後者のみである。両者が共有する大前提や，専門家たることの前提が意識化されてそれが詮索されることは原理的に好事家を別とすれば制度的に対応していない。すなわち，そこに何か問題の原因が存在する場合は，通常科学となり制度として確立されていればいるほど，この原因が温存され，いつまでも解消されないということである。したがって，経済哲学の仕事は，経済認識の大前提の意識化，明示化，対象化による省察であり，専門家が専門家としてなしていることの明示化と大前提に照らした妥当性の吟味が経済学方法論であるならば，この経済学の長年の嘆きは，まさしく経済学の哲学と方法論が解明すべきテーマであろう。しかし，このような重大なはずのテーマは，制度化がされていないがゆえに，あるいはそもそも制度それ自体の外でこそ意味ある研究ができるがゆえに，この種の研究は経済学という大きな制度内の空隙や周縁でなされてきたとも言えよう。

Lawson（1997）は，このような根本的な問題について哲学と方法論の観点からなされた研究である。哲学と言っても，ローソン自身は数学科出身で計量経済学を過去4半世紀以上にわたってケンブリッジ大学で講じてきた研究者であり，哲学者が外から経済学を批判したわけではない。また，ある経済理論が誤っているとか誤っていないとか言ったのではなく，むしろ，Donaldson（1984）が指摘するところの「不適切さ（irrelevance）」（Lawson, 1997, 3）の因って来たる所を明らかにしたのである。問題の所在は方法論にあり，それは経済学における明示的な存在論の不在に起因している。この不在によって，数学モデルによる演繹主義という方法をひたすら強化する方向へのみ学問が特化してきたのであるが，この方法はある特殊な存在論を前提とするものであって，経済学の大前提もそこに含まれるはずの社会存在論（Social Ontology）を鑑みるとき，全く一般性を欠くものであるとローソンは主張したのである。社会存在論は，20世紀後半に，Bhaskar（1998）やArcher（1995）などの批判的実在論者と呼ばれる人々によって特に議論されていたのであるが，21世紀になって，言語哲学の伝統からSearle（2009）が批判的実在論とは全く別の議論として社会存在論を唱え，歴史的存在論のHacking（2002），集合的志向性のTuomela（2013）などが注目を集め，社会科学共通の基礎論としての社会存在論が議論されるようになった。社会存在論のための国際学会がヨーロッパを中心に組織され（International Association for Social Ontology），このための国際的な大会（The European Network on Social Ontology）が2007年から2015年にかけて既に4回開かれている。この学会はウイーン大学の

[2] フリードマンは，'Complete "realism" is clearly unattainable, and the question whether a theory is realistic "enough" can be settled only by seeing whether it yields predictions that are good enough for the purpose in hand or that are better than predictions from alternative theories.'（Friedman, 1953, 41）と述べており，理論が十分に現実的かどうかは，他の理論と比較した予測能力で決まると主張している。

哲学部を拠点とし，ヘルシンキ大のR. トゥオメラが会長であるが，批判的実在論にも一目置いており，2013年第三回ヘルシンキ大会のキーノートスピーカーには批判的実在論の社会学者でローソンにも教えを受けたD. エルダーバスが呼ばれている。ローソンの一派はケンブリッジ大を中心にCSOG（Cambridge Social Ontology Group）を組織し，2004年には批判的実在論の国際大会を主催し，2012年にはパリ（パンテオン・ソルボンヌ）で開かれた非主流派経済学の世界大会では特に社会存在論の部会を主宰した。またCSOGはサールのBSOG（Barkley Social Ontology Group）とも活発な討論を行い，論争を繰り広げている[3]。

本論では，このように近年注目を集めるようになった社会存在論と経済学方法論の関連を，ローソンの経済学批判の出発点となったバスカーの哲学から説き起こす。そして，ローソンの方法論批判としての経済学批判が既存の理論の否定であるというよりも，経済学における明示的な存在論の不在の指摘であり，この不在を埋めるべく待ち受けている社会存在論の経済学への意味を考察する。

2　超越論的実在論の主張

Bhaskar（1997）は実在論を唱えたのであるが，この実在論とはいったい何を意味するのか。ふつう我々が生活をしているときの行動の前提は素朴実在論である。目の前に机があるとき，それは自分の心とは独立にそこに机があるものと思っている。理科系の研究者も，特に改めて自分の研究の対象が何なのか意識的に思いをめぐらさない限り，実在論者である。このようなもっとも単純で素朴な実在論とは，人間が認識しようとしなかろうと，対象となる世界はそれとは独立に存在しているということである。ところが，その対象となる世界とはいったい何であり，しかもどうしてそれが分かるのかという問いに答えようと努力を開始すると，哲学者は様々な教説を唱えはじめる。バスカーはこの哲学者たち，とりわけ，ヒューム以来の実証主義者と呼ばれる人たちが作り上げてきた教説に反論して，独自の実在論を打ち立てようとした。Bahskar（1997）はまず，第一章の冒頭から，我々の知識には二つの側面があると主張する。一つは，それ自体は人間の知的営みによって何の変更も加えられることのない人間から独立で自律的な対象についての知識という側面であり，もう一つは，人間が生み出し，加工し，修正し続ける暫定的な知識という側面である。この後者に還元できない前者の対象を主張するところがまず，普通の意味における実在論である。科学哲学で，道具主義と対比して言われる実在論は，この前者の対象を一義的なものとして，それに向かって知識の後者の側面を修正する科学の立場である。バスカーは，ここで世界の完全な記述があるかどうかという問題に向かわない。むしろ，人間の生産物である知識の後者の側面が，科学という営みによって前者の側面を獲得することが可能になるためには，そもそも対象となる世界がどのような存在でなければならないかを問う。バスカーは，我々のすべての知識を経験という実在に還元しようとする立場を経験的実在論と呼ぶが，それでは科学は不可能で，実在に三段階の構造があることによって科学が可能になると主張する。

バスカーの主張する実在の三段階とは，経験（experience），事象（event），メカニズム（mechanism）である。これらはすべて実在の領域（domain of the real）にあるのだが，経験と事象のみが実際に生じていることであり，実現の領域（domain of the actual）にある。また，経験のみが，人間の直接知る領域（domain of the empirical）にある。したがって，成功した科学的認識とは，ある目的とする特定のメカニ

[3] CSOGについては，Pratten ed.（2015），および，http://www.csog.econ.cam.ac.uk/ を参照。

ズムが単独で引き起こす事象が実際に生じ，それを人間が経験した場合である。しかし，経験的実在論は，事象とメカニズムが存在している段階を区別せず，しかもこれらを経験のみの一元的段階でとらえる実在論である。すなわち，すべての経験が等しく科学的に意味のある認識となっているという世界を前提とすることになるのである。これは科学の現実に反する。というのも，科学者は科学的に意味のある経験を経験一般から区別することによって，科学理論を打ち立て，また検証するからである。リンゴが木から落ちることによって万有引力を着想することはあるかもしれないが，それでもって万有引力を科学的な理論とするための「経験」であるとする科学者はいない。

そこで，バスカーは実験室が何のためにあるかを考える。実験室というのは通常の自然な世界の中では生じない事象の規則性を起こすために人為的に作られた施設である。さて，実際に生じる事象の規則性が実験室の中で確認されたとき，その科学的発見の実験室の外での地位はどのようになるのであろうか。もし，世界には，実際に生じる経験と事象の二つの実在の段階しかないとすると，発見された事象の規則性（＝科学法則）は実験室の中でのみ実在し，実験室の外ではこの事象の規則性は生じないのであるから，実在しないことになる。実験室の中の科学法則は，実験室の中だけに実在する科学法則となるのであろうか。それだけではない，科学者は，実験室の中である規則性を観測するのは，その規則性そのものを知りたいからだけではない。そのような規則性の生じる構造やメカニズムを突き止めようとしているからである。科学理論は，規則的に生じる事象やパターンについての知識のみから成り立っているのではない。すなわち，実験室の外でも実験室の中で確認された科学理論は有効であり，しかも，実際に生じる事象やパターンそのものが科学理論ではないとすると，それは実在の第三の段階，すなわち，事象を引き起こすメカニズムの段階もまた実在することになる。メカニズムとは「ものの作用のしかた（the ways of acting of things）」（Bahskar, 1997, 14）にほかならない。経験的実在論には，この第三のメカニズムの段階が事象の段階から区別されて存在せず，それゆえ，科学的営為が説明できない。バスカーは，この実際に生じている事象の範疇にはいらないメカニズムの段階の実在を主張し，この自らの立場を超越論的実在論（transcendental realism）と呼んだ。こうしてバスカーは，知識の対象となっている世界がどのような構造になっているかという存在論を考えることで，実証主義が経験的実在論という実在の三段階を一元的にとらえ，常に事象の規則性が成り立つ世界を暗に主張していることを見出し，そしてまたそれは科学的営為が意味を持つ前提とはならないと主張したのである。

なぜこの主張に「超越論的」という名前がつけられているのか。それは，「超越論的な問い（transcendental question）」の答えだからである。「超越論的な問い」とは，

> Xが可能であるためには，世界はどのようでなければならないか。

という形式の問いであり，バスカーは「科学が可能であるためには世界はどのようでなければならないか」という問いを立て，それに答えたがゆえに「超越論的」なのである。実際Bhaskar（1997）は常にこの問いに答える形で叙述をしている。まさにこの問いかけがなければ，バスカーの超越論的実在論は生み出されなかったであろう。しかし，その一方で，この問いの形式を見る限り，条件を絞り込むことによって答えを見出すのは容易ではないとしても，その解答は唯一なのか定かでない。そして，この推論の必然性という点から批判を呼ぶことにもなった。このような問いの立て方，

そして，「超越論的（transcendental）」はいうまでもなくカント由来である。しかし，Bhaskar（1997）では「超越論的議論（transcendental argument）」が議論の要ではあるが，カントについて詳細には言及しているわけではない。Kaidesoja（2013）はこのバスカーの「超越論的議論」をカント『純粋理性批判』のものと比較検討し，同じ言葉ではあっても，意味が違うこと，さらに，意味が違うがゆえにこのバスカーの「超越論的議論」には何の必然性もないことを見出した。そして，批判的実在論を，より自然主義的に受け入れ可能なものにするためにはこの「超越論的議論」を外すことを求めた。確かに，Bhaskar（1997）に提示されている内容は，経験的実在論では科学的営為をうまく説明できないこと，そして，バスカーの主張であれば，バスカーが取り上げている範囲の科学的営為では，説明がつくということである。Kaidesoja（2013）の批判はそれ以上の強い論証はできていないというものであるが，存在論を明示化しようとしたことで隠れていた問題点が明らかになり，行き詰っていた議論に新たな方向性があることを示したことは確かである。実際，Kaidesoja（2013）は，ようやく社会科学者による社会存在論への関心が高まる中，「超越論的議論」を除くことで，批判的実在論者の社会存在論をより発展させることを目論んでいるのである。

3　ローソンの経済学批判の構造

それではLawson（1997）はどのようにバスカーの超越論的実在論によって経済学を批判したのであろうか。バスカーの議論は，ヒュームに始まる実証主義，論理実証主義，反証主義，道具主義の系譜を批判したのであるから，単純に考えれば，主流派経済学はこれらの科学哲学思潮に乗っているのであるから，同罪であると一刀両断に批判できそうである。実際，そのような議論も可能であろう。しかし，ローソンはもっと慎重な手順を踏んでいる。ローソンは経済学の方法論がその存在論に合致していないと論じるのであるが，経済学について繰り返し述べていることは，そうであるかどうかは先験的にはわからないということである。どこまでも，実際になされた経済学の研究の成果と経済学者の言説を根拠に，事後的な経験を吟味して，その方法論が存在論に合致していないと説得しようとしている。この点は，超越論的実在論という先験的に必然的な論証ができそうな響きのある哲学を標榜してはいても，実際の主張の仕方は難解な論証を用いるというよりも，素朴な経験主義に訴えている。

ローソンが吟味したことは経済学の対象が「閉じた系（closed systems）」であるかどうかである。「閉じた系」という概念は決して一般的なものではない。起源としてはBertalanffy（1969）のシステム論であるが，ローソンはBhaskar（1997）が用いた概念[4]から採用している。ローソン自身の定義を見る限り，システムがどうなっているかについての言及はない。単に事象（event）の間に規則性が存在するかどうかによって定義している[5]。この事象という概念は，バスカーの超越論的実在論の中では特別な意味を持っていた。上に述べたように，バスカーの実在論では経験，事象，メカニズムは各々存在論的に区別され相互に干渉することの

[4] バスカーはヒューム主義者の法則概念との関連で，次のように述べて，「閉じた系」という概念を導入している。‘The weakness of the Humean concept of laws is that it ties laws to closed systems, viz. systems where a constant conjunction of events occurs.’（Bhaskar, 1997, 14）.

[5] ローソンは，演繹主義と関連付けて次のように「閉じた系」という概念を説明している。‘It is clear, in fact, that if the theory of explanation and science in question turns upon identifying or positing regularities of the form ‘whenever event x then event y’ - let us refer to systems in which such constant conjunctions of events arise as *closed* - then a precondition of the universality, or wide applicability, of deductivism is simply that reality is characterised by a ubiquity of such closures.’（Lawson, 1997, 19）.

ない領域に実在するのだが，科学はこの第三の実在領域にあるメカニズムを探求するのが目的である。しかし，いくら実在していようとも，人間は経験以外，直覚することができない。そこで何とかしてメカニズムに経験から到達することが出来なければ科学は不可能である。仮に経験から事象に到達しようとも，事象そのものはメカニズムではないのであり，しかも，事象一般は未知も含めた不特定多数のメカニズムが複合して生じているのである。実験室ではメカニズムが事象の内に規則性として実現する条件を生み出すことで，ここにはじめてあるメカニズムの作用が観測可能になるのである。実験室の外の世界は，不特定の多様なメカニズムが同時に作用しているがゆえに，確かめたいメカニズムの作用を事象の規則性から取り出すことが出来ない。この実験室の中の条件とは，すなわち，あるメカニズムを反映した事象の規則性が生じるシステムであり，これをバスカーが「閉じた系」と呼んだのである。それに対して，不特定多数のメカニズムが不断に介入して事象の規則性が現れないシステム，すなわち，実験室の外の我々が通常生きている世界を「開いた系（open systems）」と呼んだ。ある意味人間は人為によって局所的に「閉じた系」を作ることによって，部分的ではあるが世界をコントロールしようとしている。時間通りに来る列車や，実験室，化学プラントはその例である。

もちろん，自然成立する「閉じた系」も存在する。典型的なものは天体の世界である。物理学の草創期に観測された天文学の対象に限るなら，その運動を支配しているメカニズムは力学のみである。つまり，天体の運動は不特定多数のメカニズムの介入を許さず，その観測される事象は常に力学のメカニズムのみを反映したものである。そして，その世界は数学的演繹によって記述し，また正確な予測が可能であった。ニュートン力学を用いて，ハレーが自らの死後に戻ってくるであろうハレーすい星を予測し，見事に的中させたのは有名な話である[6]。もちろん，天体の観測データには誤差がつきものであるので，それを正すためにガウスが最小二乗法を考案したのである。つまり，「閉じた系」では，その事象の規則性という性質上，数学モデルで記述し，演繹し予測することが可能であり，また，その実際上のデータの誤差は統計的に正すことによって精度を高めることのできる性質を有しているのである。ローソンはこのような性質を程度の差はあるとしても，経済が持っているかどうかを，経済学の理論分析と計量分析について吟味したのである。「閉じた系」をバスカーは確かにメカニズムと事象の存在論的な区別を議論する文脈で述べていた。しかしここで注目すべき点は，仮にローソンの念頭にこの区別があったとしても，経済学に関する議論の中で必要とされる要件は事象間に規則性が存在するという性質を有するかどうかということであり，事象の規則性の存在が数学的演繹主義の大前提である。

結論は，特殊な例を除けば，一般には経済学の問題にかかわるような事象において，「閉じた系」にはなっていないということである。したがって，「数学的演繹主義者のモデル作りという方法（methods of mathematical deductivist modelling）」（Lawson, 2003, 3）に経済学が特化していく一方で，その数学的洗練度に見合う現実説明能力がない，あるいは現実離れが進行するという，第一節に述べた大家の嘆きが生じるのは当然の帰結なのである。対象の性質としての存在論に方法が合っていない。もちろん，ある特定の問題や現象について，数学モデルが有用となりうることを否定するものではないが，経済学一般がそれに特化する理由はないというわけである。数理経済学の意義を否定したのではない。経済学一般が数理経済学にならねばな

[6] ラカトスはこのハレーすい星の逸話を，ニュートン力学が科学の証となる新奇な事実の予測の例としてあげている。（Lacatos, 1978, 5）.

らないことを批判したのである。

では，数学モデルと統計分析以外に経済学は何をすべきだとローソンは主張したのだろうか。「閉じた系」になっていないことが科学の終わりではない。それは事象の規則性をモデル化しようという試みの終わりでしかない。Lawson（2003）は，Lawson（1997）の批判からさらに進んで，経済学の社会存在論へ方向転換を求めた。すなわち，経済を含む社会というものがどういう構造と性質をもっているのか，いったい何がそこに存在しているのかを探求することである。事象の規則性が期待できない「開いた系」とは，ただの混沌ではない。例えば，生物の進化は予測可能な規則性で生じたのではなく[7]，予測不能な構造化とメカニズムの絶えざる出現であり，絶えざるプロセスにありながら何らかの秩序が創出されつづける世界として生じたのである。「閉じた系」を前提とする分析手法は最初からのこのような世界のありようへの探求を放棄している。さらにLawson（2003）では，主流派以外の経済学の存在論を検討し，オーストリー学派，ポストケインジアン，制度学派，マルクス主義者はすべて，「閉じた系」という存在論を持たないがゆえに主流派と区別されることを明らかにした。

Lawson（1997）においては，確かに，超越論的実在論がその出発点に据えられていた。ローソンの議論はバスカーの定義した「閉じた系」，「開いた系」という概念を鍵に，暗黙の存在論を明示化することによって問題点を明らかにしたという点で，バスカーの哲学に大きく影響されたことは間違いない。しかし，その一方で，超越論的実在論の主張を根拠として経済学を批判したわけでない。すなわち，バスカーの経験（empirical），実現（actual），実在（real）という3領域の明確な区別のなされる実在論によって，実在（real）領域のみにあるメカニズムを経済学は物理学のように探求すべき，あるいは探求できると述べたわけではない。むしろ，経済学の学問的前提としての明示的な存在論探求が不在であることを発見したのであり，これによって主流派経済学の60年以上にわたる宿痾の正体を突き止めたのである。

4　社会存在論

こうして，Lawson（1997）で提起された経済学批判は，Lawson（2003）での経済学の存在論への方向転換の提案，Fullbrook（ed.）（2009）でのローソンへの批判と応酬を経て，これとは独立に生じてきたヨーロッパでの，そしてアメリカの言語哲学からの社会存在論への関心の高まりを迎え撃つこととなった。このような状況を背景に，ローソンとCSOG（Cambridge Social Ontology Group）のメンバー，そしてその問題を共有する人たちは[8]，実在論そのものよりも社会存在論へと重心を移した。本節では，この高まりつつある社会存在論の議論の枠組みを検討しながら，経済学へ積極貢献をなしうる社会存在論とはどんなものであるかを考える礎としたい。批判的実在論者の社会存在論としてはBhaskar（1998），Elder-Vass（2010）を，より広範な関心を集めている社会存在論としてはSearle（2009）に着目する。

批判的実在論者も，サールも，社会存在論というとき，その特徴は自然主義である。自然と精神を対比して，自然科学とは本質的に違う特異性を精神科学が主張するならば，それは自然主義ではない。そのような議論は自然世界と精神世界という二元論的な世界を考えて，各々の

[7] もちろん，物理化学の法則は満たしたうえでのことである。単細胞生物が，いつしか魚になり，そして恐竜へ進化し，やがて鳥になることを予測できるような規則性はないという意味である。

[8] CSOG（Cambridge Social Ontology Group）を中心とするローソンと問題を同じくする人々とはPratten（ed.）（2015）に寄稿している人たち，さらに，Lewis（2015），Elder-Vass（2010）を念頭に考えている。

世界で知解可能な論理が異なることを主張するのである[9]。例えば，自然科学は法則による「説明」を，精神科学は「理解」を目的とするというような類である。もちろん，これに社会科学という三つ目の世界を加えて三元論的な世界を前提としてもよいであろう。これに対して自然主義は，Bhaskar（1998）であれば，精神と物質の二元論の解消を図り，自然科学も社会科学も同じ意味で科学たりえることを主張する。サールは「いたるところすべてが力場の中の素粒子からなるこの宇宙において，いかに，意識，志向性，自由意志，言語，社会，倫理，美学，そして政治的義務のようなものの存在が可能となるのか」（Searle, 2009, 3）という問題を取り扱う。つまり，批判的実在論やサールの社会存在論とは，社会という存在を人間精神と共に，自然科学が理解している世界の中に位置づけようという試みなのである。Bhaskar（1998）では，そもそも哲学者の自然科学理解が誤っていた点から，自然科学と人文社会科学の方法論争の前提へと切り込む。サールは，「フレーゲ，ラッセル，ヴィトゲンシュタイン，クワイン，カルナップ，ストローソン，オースチン」がたどり着けなかったその先を，「彼らの肩に乗って彼らが見なかった大地」（Searle, 2009, 6）を見ようと述べ，分析哲学の伝統のその先にあることを強調する。

ある学問が現実的でないという批判があるとき，そこには二通りの意味がある。一つ目は実際に現実で起きていることを描いていないという場合であり，もう一つはそもそも物理化学や生物の制約を無視した架空の議論をしているという場合である。経済学の理論体系は，論理的な完全性に固執することはあっても，この自然世界のどこに位置するのか不明な点が多い。純粋に学問的な体系性，首尾一貫性，厳密性が大切であるならば自然主義はいつかは問われねばならない問題のように思われる。したがって，社会存在論の内容に踏み込む前に，自然主義という，経済学者はあえて無視してきた基準を哲学がまじめにとりあっていること自体，経済理論がどうあるべきかについてこれまで不在であったものの一考を迫るものである。

それではいったいどうやって，素粒子から政治的義務までを，神秘主義にならずに，統一的に結び付けることができるのか。それはまさに身の回りの単純なものの存在論を考えてみるとよい。パソコンのキーを今叩いてこの文章を書いているのは私か，私の指か，私の脳のある神経か，神経を伝っている電気的刺激か，いや，私の指先を構成している細胞か，細胞であるならばその細胞を作っている分子か，それとも分子であるならば，究極的にはその原子，素粒子か，いったいどれであろう。あるいは，「私」と思っているが，実は私の「習癖」のなせる業か，私に宿っている観念か，はたまた，記憶に深く眠っているElder-Vass（2010）の文章の記憶か。こうして数え上げてわかることは，どれもすべてが，同時に，今私と共にあって，これを書いているのである。もっとシンプルな自然存在の例で整理して考えてみよう。

一匹の大腸菌を考える。大腸菌と呼んでいるものはなんであろうか。よく見るとそこには細胞膜，核，多くの細胞器官が見つかる。しかし，大腸菌は単にこれらの部分が単純に寄せ集まっているのではない。ばらばらにしてしまえば，もはや大腸菌としての特性は失われる。さらに分解をして炭素，窒素，酸素，水素等の構成原子や分子にしてしまえば，それは大腸菌でもなんでもなくただの原子や分子である。しかし，これらは大腸菌であった時もどこか別のところにあったわけではない。それらは細胞膜や核や細胞器官であった。つまり，生物としての大腸菌と物質としての原子は同時に同じものを構成し，原子が他の原子とある特別な関係に置かれたとき，それは大腸菌の一部として存在し

[9] たとえば，Winch（1960），Wright（1971）を見よ。

ているのである。この時，個々の原子がばらばらの状態でもっていた性質には，大腸菌としての性質はどこにも存在しないが，大腸菌となった時始めて，この原子や分子の集まりは大腸菌の特性を作り出すのである。同時に，大腸菌の一部になったからと言って，原子や分子が物理科学法則から逃れられるのではなく，まさにそれに従いつつ，物理科学法則では何も決定されていなかったある特殊なふるまいをするようになるのである。これが，新たに出現した特質なのである。この分析は，原子をさらに分解して行っても同様の論法で説明ができる。原子というのは実は素粒子があつまったもので，しかも，各々の素粒子がある特別な関係に置かれたとき，ある原子と呼ばれるものを構成し，安定してその原子であることを持続し，個々の素粒子が独立ではもっていなかった性質をその原子はもつようになる。このようにして，大腸菌は同時に原子であり，素粒子である。もし，大腸菌ではなく，多細胞生物の一細胞を考えていたのだとすると，今度はさらに構造化したその生物のより高次な次元の特性，能力が，細胞以下では持ちえなかったものとして出現するであろう。つまり，素粒子物理や化学，生物学でおのおの着目している存在は違うかもしれないがそれらは一つの中に同時に存在しているのである。この議論を抽象化すると，何かある「もの（全体）」はそれを構成する「部分」がある特別な「関係」に置かれたとき，ある特性として出現[10]しているのである。そしてその部分もまたある特性を持つ「もの（全体）」なのであって，さらに細分化されたその部分とそれらの特殊な関係，つまり構造によってその部分の特性が出現しているのである。素粒子から生物まで，このような構造になっていることがわかる。どのレベルに分解しても，構造とそれをつくる部分からなるのである。これは，単純に一元的な構造にすべては還元できると述べているのではない[11]。各々の部分とは便宜的な幻想ではない。その部分が単位としてある特別の特性を発揮するから，部分なのである。原子は素粒子からできていても，原子という構造化されたレベルである特性を持つがゆえに，原子という実在が存在しているのである。どのレベルに分解しても入れ子のように，そのレベルの部分と構造からなっている。そしてあるレベルの「もの」の特性はその部分と構造から出現している。単に部分が持っていた特性の単純な寄せ集めではない。これがElder-Vass（2010）の論じる批判的実在論者の存在論である。Elder-Vass（2010）は，この存在論を，社会レベルにまで敷衍して，社会的な力がどのように個人主体と人々の間の構造から生み出されるかを論じ，社会学の理論として社会存在論を議論した。

これに対して，Searle（2009）は，自然的存在には全く含まれない「制度的事実（institutional fact）」，例えば「ドナルド・トランプが合衆国大統領に選出された」という事実が，自然的存在である人間からどのように生み出され，人々の協力というものが可能になるのかという点に焦点を合わせ，これを言語行為から導出しようとする。「制度的事実」は「地位機能（status function）」が自然的存在である人やものに押し付けられることによって発生する。貨幣が良い例である。貨幣は自然的存在としては金属や紙，あるいは磁気である。物質としての特性をどこまで分析しても，あるものが貨幣であるという事実は出てこない。特定の形を与えら

[10] この「出現」は，‘emergence’である。これには「創発」という訳語があてられることが多いが，‘emergent’，‘emergence’は英語において特別な言葉でなく，日常言語としての「出現」と意味の乖離を起こすことなく同時に「創発」という意味を負わされているのである。本論では「創発」について特に論じないので，日常言語の意味のまま「出現」とした。

[11] もし，一元的に説明可能なら，原子も素粒子も幻想，あるいは便宜的概念であって，本当に存在しているのは未知の究極の存在とそれらの構造にすべて還元できるということになる。

れた金属や紙や磁気に対して，貨幣であるという「地位機能 」が押し付けられてはじめて，そしてそれを人々が貨幣であると認めてはじめて，ある自然的存在が貨幣であるという「制度的事実」が創造されるのである。この人々が認めるかどうかということは，すわなち，ある個人がどう思うかのみならず，「集合的志向性（collective intentionality）」に依存するということである。ここで注意すべき点は，「集合的志向性」とは人間の脳としての物理的制約を受けた個々人の「志向性（intentionality）」に依存しているのであり，何か神秘的な力が作用しているわけではない。そしてサールはここに人々が協力するメカニズムがあることを明らかにする。「制度的事実」が生じると，人々にはその当人の欲望に関わらずある行動をしなければならない「義務的な力（Deontic Power）」が発生する。貨幣の例であれば，商店は貨幣の持参者に，商品を販売する義務が発生する。ある人間に教員という「地位機能」が付与されると，授業日には授業をしたいしたくないにかかわらず，授業をしなければならない義務が発生する。もちろん，これは履行されない可能性も含まれるからこそ義務なのであるが，この「義務的な力」によって「地位機能」は「行為者の欲求に関わらない行動の理由（desire-independent reasons for action）」を提供する。こうして人々は協働し社会を構成することになる。およそ社会と呼ばれるものは，この「制度的事実」を生み出すプロセスが幾重にも積み重なって作られている。「制度的事実」は存在論的に主観的であり，認識論的に客観的である。すべての社会科学はこのような事実に関するものである。社会存在論は，自然科学に例えれば，自然的存在が原子から成り立っているとき，その原子の成り立ちを示すようなものである。個別の社会科学は社会存在論の終わるところから始まる。これがサールの社会存在論の概要である。

バスカーが，そしてついでローソンが指摘したように，実証主義，そして主流派経済学は，その存在論としては「閉とじた系」を前提とし，事象の規則性をその研究の対象とした。これに対して，批判的実在論が提示する社会存在論は，まず着眼している対象は，事象ではなく，特性を持って存在するものである。「開かれた系」とは定義により，事象の規則性が存在しないことを意味するが，これは単なる混沌ではない。これはちょうど登場人物はわかっていても，劇中で生じる出来事に規則性がないからと言って意味不明の演劇にならないのと同様である。「開かれた系」の社会存在論は，登場人物に相当する社会的存在のありかたと性質に関心を寄せているのであり，人々の偶発的な関係性が，どのような個人を超えた力となるかについて関心を寄せているのである。事象とはこの比喩では演劇内の出来事になるが，事象の規則性が保障されていないということは，原理的に，出来事としてはもはや何が起こるかわからないのであって，事象に焦点を当てた演繹的推論，あるいは確率的予測は意味を持たない。偶発的関係性がどのような特性を持つかは，その時がやってくるまで事前に分かるものでもない。演劇であれば登場人物とセッティングがわかっていなければ何が生じたのかわからないように，既に存在するものの性質と世界の基本的構造の把握こそが，どんなものが今新たに存在を開始しているのかを知る唯一の前提であろう。逆説的であるが，そのような存在論を探求することは，ブラックボックスの規則性を見つけようとする道具主義よりもプラグマティックですらありうるかもしれない。

5　結論

トニー・ローソンの経済学批判が世に問われ 20 年近くが経とうとしている。この経済学批判は，欧米の反主流派経済学者の中では最もよく知られた主流派経済学の根本的批判となっ

た。主流派経済学は，主流派であるためにある特定のイデオロギー的主張をしているわけでもなければ，数学モデルに何か特定の手法や仮定，結論を要求しているわけでもない。したがって，イデオロギー的主張の有無，用いられて数学モデルの仮定や結論を批判しようとも，それは実は主流派経済学自体の批判ではなかった。主流派は，数学モデルという最も客観的で厳密かつ内容的には中立の，一見，あらゆる可能性を容認する偏見のない科学の体裁をとっていると見なされていた。それゆえ，そもそも主流派経済学の何が主流派であるかを通時的に一貫して定義することすら困難であった。それに対して，ローソンは，実は偏見のない中立的な科学であると思われていた経済学に潜む大前提を摘出した。それは，「数学的演繹主義者のモデル化という手法」が，一見中立的に見えて，実は世界がどのようになっているかという存在論の次元において，ある特殊な前提を置いていたということである。そして，主流派経済学と非主流派経済学を分けていたものは，見かけ上の主張や結論ではなく，この存在論に次元における相違であったことを明らかにした。この隠された存在論は，それ自体，直ちに誤りであるとかないとか判断の付くものではない。しかし，その存在論を暗黙に前提としてなされた経済学の過去半世紀以上にわたる成果とその実践者たちの言説を分析する限り，この存在論を疑うに十分な理由がある。それだけではない。意識化されていない存在論は，人々がそこから自由に考えること許さず，仮に虚妄を抱いていようとも容易には抜け出られない状況を作り出すのである。それゆえ，ローソンは経済学の存在論的転回を主張した。

ローソンのこの主張は，バスカーの超越論的実在論に影響されたものであり，ローソン自身は最初，超越論的実在論をその議論の中心に据えた。しかし，バスカーの超越論的実在論とローソンの経済学批判を詳細に比較検討すると，暗黙の存在論に問題が潜んでいるという着想が両者の共通点であり，これは確かにバスカーが超越論的問いと呼んだものに導かれたものである。しかし，ローソンのとった手法はひたすら経済学の経験を反省しその前提に何があるかを考察したのであって，それは超越論的実在論というよりも経験主義的説得に依存している。バスカーの超越論的実在論は，その超越論的議論ゆえに導かれたのは事実であるが，「超越論」と呼ぶところに問題を見出す論者もいるのは事実である。ローソンはその経済学批判の主張に関する限り，超越論的実在論の主張に依存する必要は全くない。

したがって，この批判の方向は，ローソン自身が最初の著書Lawson（1997）から志向していた社会存在論へと発展する。もちろん，社会存在論はバスカーを筆頭とする批判的実在論者が長く取り組んできた主題である。しかし，批判的実在論とは独立に，ヨーロッパと北米で哲学者と社会科学者による社会存在論への関心が21世紀初頭から高まりはじめ，ローソンはむしろこの動きを迎え撃つことになった。いまや社会存在論それ自体の内容も豊かとなる一方で，経済学は自らの存在論をほとんど明示してはいない。一方，社会存在論の議論には，サールのように貨幣が突出した例として出てくる一方で，経済がどこに位置するのかいまだに不明である。これは経済学のなかの不在であると同時に，社会存在論における不在でもある。ここに我々の知性は今や新たに埋められるべきものを求めている。

参照文献

Archer, M. (1995) *Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach,* Cambridge: Cambridge University Press.

Bertalanffy, L. (1969) *General System Theory: Foundations, Development, Applications*, New

York: George Braziller.

Bhaskar, R. (1997) *A Realist Theory of Science* (Verso Classics), London: Verso Books, 式部信訳（2009）『科学と実在論―超越論的実在論と経験主義批判』（叢書・ウニベルシタス），法政大学出版会.

Bhaskar, R. (1998) *The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences* (*Critical Realism--Interventions*) *3rd edition*, London: Routledge, 式部信訳（2006）『自然主義の可能性―現代社会科学批判』，晃洋書房.

Coase, R. (1999) "Interview with Ronald Coase," *Newsletter of the International Society for New Institutional Economics*, 2, 1, Spring.

Donaldson, P. (1984) *Economics of the Real World* (*third edn*), Harmondworth: Penguin.

Elder-Vass, D. (2010) The Causal Power of Social Structures, Cambridge: Cambridge University Press.

Friedman, M. (1953) "Methodology of Positive Economics," in *Essays in Positive Economics*, Chicago: University of Chicago Press.

Friedman, M. (1999) "Conversation with Milton Friedman," in Brian Snowdon and Howard Vane(eds) *Conversations with Leading Economists: Interpreting Modern Macroeconomics*, Cheltenham: Edward Elgar, 124-144.

Fullbrook, E. (ed.) (2009) *Ontology and Economics: Tony Lawson and His Critics*, London: Routledge.

Hacking, I. (2002) *Historical Ontology,* Cambridge MA, Harvard University Press.

Kaidesoja, Tuukka (2013) *Naturalizing Critical Realist Social Ontology*, London: Routledge.

Krugman, P. (2009) "How Did Economists Get It So Wrong?" *The New York Times*. September 6.

Lakatos, I.(1978) "Science and Pseudoscience," in *The methodology of scientific research programmes Philosophical Papers, Volume I,* edited by John Worrall and Gregory Currie, Cambridge: Cambridge University Press.

Lawson, T. (1997) *Economics and Reality*, London: Routledge.

Lawson, T. (2003) *Reorienting Economics*, London: Routledge.

Lawson, T. (2015) *The Nature and State of Modern Economics*, London: Routledge.

Lawson, T. (2015) "Process, order and stability in Veblen," *Cambridge Journal of Economics*, 39, 993-1030.

Leontief, W. (1982) "Academic Economics," *Science,* 217: 104-107.

Lewis, P. (2015) "Notions of order and process in Hayek: the significance of emergence," *Cambridge Journal of Economics*, 39, 1167-1190.

Pratten, S. (ed.) (2015) *Social Ontology and Modern Economics*, London: Routledge.

Pratten, S. (2015) "Dewey on habit, character, order and reform," *Cambridge Journal of Economics*, 39, 1031-1052.

Searle, J. R. (1996) *The Construction of Social Reality*, London: Penguin Books.

Searle, J. R. (2009) *Making the Social World: The Structure of Human Civilization*, New York: Oxford University Press.

Tuomela, R. (2013) *Social Ontology: Collective Intentionality and Group Agents*, New York: Oxford University Press.

Winch, Peter (1960) *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, second edition, London: Routledge.

Wright, G. H. von (1971) *Explanation and Understanding*, London: Routledge & Kegan Paul.

Why is Social Ontology significant for the methodology of economics?

Masaaki Katsuragi

Almost twenty years ago, when the first book of Tony Lawson's critique of mainstream economics was published, Transcendental Realism was at the heart of his argument. Indeed, his argument was led by the doctrine, however his claim *per se*, that 'mathematical−deductivist methods are being applied in conditions for which they are not appropriate', could be maintained without Transcendental Realism. It was not ontological distinction between events and mechanisms but the revelation of hidden ontology of modern economics that was crucial for identifying the causes that make 'the mainstream project perform so poorly'. The discipline must turn to the explicit argument of the ontology, in the sense that the nature of the object of theorising must be considered seriously. Social Ontology now attracts wider attention from social scientists who are concerned with the foundation of their disciplines. Nevertheless, the absence of social ontology in economics is real and the absence of economics in Social Ontology is also real. Here we have a real and urgent problem in both economic theorising and the philosophy of economy.

JEL Classification Number： B41, B59
Keywords： Methodology of Economics, Economic Philosophy, Critical Realism, Social Ontology